

【氏名】 朴 麗玉

【所属大学院】（助成決定時） 京都大学大学院

【研究題目】

近世演劇の比較文学的研究

—「三国志演義」の日本演劇化からみる東アジアと日本の近世—

【研究の目的】

「三国志演義」は出版されてまもなく朝鮮や日本に流布し、広く読まれた作品である。その点、「三国志演義」は同時代に東アジアが共有し、共感出来た文化コードの一つであったと言えよう。

いわゆる和漢比較文学の研究は盛んに行われ、眩しい進展を遂げてきたが、演劇に関しては十分ではない。「三国志演義」の日本演劇化の考察は、演劇における和漢の比較研究に広く東アジアという新たな視点を提供してくれる。つまり、「三国志演義」の日本演劇化の特徴を究明する為には、中国や朝鮮における「三国志演義」の享受の様相を知る必要があり、これは近世日本と東アジアの問題にも関わるのである。

日本と東アジア諸国との交流と協力が求められる今日において、本研究は相互理解の為の一つの手がかりになると思われる。

【研究の内容・方法】

「三国志演義」に関する様々な研究領域の中で、本研究は日本と中国そして朝鮮において共に民衆が主体であった演劇に焦点を当て、次のような研究内容で考察を進めた。

- (1) 日本の演劇における「三国志演義」の享受の様相
- (2) 中国と朝鮮の演劇における「三国志演義」の享受の様相

日本における「三国志演義」の最初の完訳本は、湖南文山による『通俗三国志』（元禄二～四）である。これは世界で二番目に早い翻訳で、「三国志演義」への関心の高さが窺われるが、その和訳本にいち早く注目し、演劇の世界に取り入れたのが近世日本の代表的な劇作者である近松門左衛門である。

まず、「三国志演義」の日本演劇化の特徴を追究する研究である(1)では、近松の作品を主な研究対象としながら、他の演劇作品も視野に入れ「三国志演義」の享受の様相について考察した。

次に、「三国志演義」を巡る日・中・韓の比較文学研究である(2)では、中国の場合は小説の「三国志演義」に限らず、広く「三国物語」を題材にした現存する明代の芝居の台本と清代の京劇が研究資料である。それから朝鮮の場合は、「三国志演義」の流入によって発生したパンソリ劇の作品を中心にし、京劇の台本との比較も試みた。

「三国志演義」以前、民間の伝承など古い歴史の中で「三国物語」を受け継いできた中国の演劇に対して、朝鮮と日本の演劇作品は「三国志演義」を原典とする共通点を持つ。しかしながらまた「三国志演義」が伝来し、普及した時代背景には朝鮮と日本の間に相違点が存在する。その点に注意しながら、それぞれの「三国志演義」から題材を選び取り、再構成する過程で見られる変容の面白さと共に共通点に注目し、「三国志演義」の日本演劇化からみる東アジアと日本の近世について考えた。

【結論・考察】

平和な近世の日本に伝来した「三国志演義」は、純粋な文学作品として受け入れられ、日本独自に解釈され劇化された。つまり、「三国志演義」の中で中国や朝鮮で注目されなかった義理や親子の情を描く話などが近松の作品に換骨奪胎されていること（詳細は論文に記載）や『通俗傾城三国志』、『諸葛孔明鼎軍談』のようなパロディー化などによって、「三国志演義」は日本の物語の中に溶け込んでいる。

一方、朝鮮における「三国志演義」の流行の背景に文禄・慶長の役があったといわれるが、それは後のパンソリ劇『赤壁歌』の成立にも影響したと思われる。本作には原典にはない無名の兵士達が登場し生き生きと描かれ、中国の「三国志演義（三国物語）」の英雄主義とはまた一味違うものになっている。

日・中・韓の「三国」の演劇作品における「三国志演義」の享受には、個別性と共に普遍性も見受けられる。大敗して逃げる滑稽な曹操の姿などは「三国」が好んで繰り返し描いた場面である（近松の『本朝三国志』、明代の台本『曹操夜走陳倉路』、パンソリ劇『赤壁歌』など）。

『通俗三国志』の首巻で、訳者文山は朝鮮での関羽信仰の由来を興味深く紹介しているが、その原文は朝鮮人儒学者、柳成龍の『西厓先生文集』からの引用である。

他方、演劇の世界では日・中・韓は「三国志演義」を以って異なる劇空間を作り出していたが、それはまた東アジアが共有した時間でもあった。近世日本の体制を規定するものとして「鎖国」があるが、文学とりわけ演劇の領域では再考すべき問題と思われる。